

コリングウッドの歴史叙述（その5）

——歴史的過程に内在する原理について——

河 瀬 明 雄

Collingwood on Historical Narration and Its Own Inner Logic, PART V

AKIO KAWASE

もしP₁がその痕跡をP₂の中に留めているとすると、P₂に生きている歴史家は、その証拠から、現在P₂であるものがかつてはP₁であったということを知るのである。P₁の現在の‘痕跡’は、いわばP₁の死体ではなく、むしろP₂という別の形の中に薙入れされた、生きて動いている真のP₁そのものである。そして、P₂は不透明なものではなく、明瞭であるからP₁はそれを通して輝き、それらの色は一つに結び合っている。もしシンボル P₁ がある時代の特徴をあらわし、シンボル P₂ をそれに続いてはいるが、それとは違ったもの（従って、あい矛盾し、両立しないもの）としてあらわせば、後者は P₂ として純粋かつ単純に特色づけることはできず、常に P₁ の残存によって染上げられた P₂ として特徴づけられる。これこそ、その時代という絹布が現実には常に対立物をその内に含んだ玉虫色のものであることをきれいに忘れて仕事をすれば、あれこれの時代を描こうとして結局は失敗する理由なのである。（下線筆者；A, 98）

この文の大半は（2）（i）の歴史過程P₁→P₂の箇所で指摘したものと同じ主旨を述べたものであるが、下線を施した最初のパラグラフは歴史認識の在り方に関するコリングウッドの立場を示唆するものであり、しかも彼が歴史過程と歴史認識とを深い関連性をもったものとして論じている点に注目し、そこに問題を解く重要な鍵があると考ええる。

すなわち、今までみてきたことでも分るように、歴史過程としてP₁→P₂を明らかにするために、彼は歴史事実の中に働く論理をいろいろの角度から私たちの前に提示してくれているが、こうした過去の人々の行為に対して歴史家はどのように関わっているというのであろうか。彼の歴史認識について、私は既に二、三論じているので、改めてそれを繰返すことは差し控えたい。（『コリングウッド小論』史学研究第83号、『歴史的解釈についての一考察』人文科学「長崎大学教養部紀要」第4巻、『Collingwood の inside/outside of event をめぐって』人文科学第6巻）従って、ここでは当面の課題である歴史認識を歴史過程との関連において彼がどのように捉えたか検討してゆくことにする。

彼が「歴史の対象は過去の事実」という一般命題に実証主義的立場から迫ろうとすれば、歴史懐疑主義に陥らざるを得ない (ESSAYS, 101) として、この迷路にはまりこまないために、歴史は現在であるとすべきだとの考えを基礎に独特の論を構築したことは余りにも有名である。すなわち、歴史家がいま、ここに有している P_2 にある証拠を説明できれば、 P_2 がどのような過程を経て P_2 になったかが分るという。ところでコリングウッドが指摘する「 P_2 に生きている歴史家」の場合、この歴史家が問うているのは文字通りの現在である。

歴史家が欲しているのは真の現在である。彼は自分を取り巻く現実の世界を欲している。(言うまでもなく、知られない、また知り得ない事物そのものの世界ではなく、見、聞き、感じ、記述された事物の世界) そしてこの世界を非現実の、死んだ、消失してしまった過去の、生きた継承物とみることができるよう望んでいる。(ESSAYS, 101)

なぜこれ程までに現在に拘泥したかについては後で論じることとし、ここでは証拠を中心にコリングウッドのいう現在のもう一つの意味を明らかにしたい。というのは P_2 がどのようにして P_2 になったかを知ることではできても、これをもって直ちに過去の出来事をすべて知ることにはならないから。たしかに、現在がどのようにしてなったということで現在は理解できても。

過去はどのようにして認識することができるかという間に答えるために、コリングウッドは知覚 perception をその手がかりとして取上げる。そして「知覚から年代記や記憶を経て、最高の意味での歴史へと進む」ところの「歴史の成長」(SM, 211) に沿って、歴史認識の働き手をさぐり、最終的に思考 thought にたどりついた。そしてこれを媒介にすることによってはじめて正しい歴史が獲得されるという。

知覚によって私たちは具体的な、従って歴史的事実である対象を直接知る。故に知覚と歴史とは同じものと言えよう。しかし、知覚の直接性は仲介を排除するものではなく、それは抽象的直接性 (感覚) ではなく、仲介の要素 (思考) を暗に含むものである。私たちが、あるものを知覚する場合、それによって私たちはいまにも考えていないと主張することを意味するかも知れないが、しかし、この主張は誤りで、知覚を分析すれば当然そこに思考が存在することが明らかとなる。たとえば霧の濃い日に行動中の将侯の一団が丘の上に動く物体を知覚し、彼らのあるものがそれを直ぐさま軍隊の一隊とみなす。しかし、よく訓練された、注意深い観測者は、その個々の動きをみて、それが軍隊ではなく羊の群であることを正確にとらえる。両方の確認とも知覚として述べられるが、こんなにも違っているのである。(下線筆者; SM, 204~5)

ここでコリングウッドは知覚と歴史との関係を取上げて論じているが、この場合の歴史は勿論 *res gestae* ではなく、思考活動としての歴史的認識と解さねばならない。²¹⁾

従って、歴史は経験の特殊形態としての知覚と同じである。(SM, 205)

ただ彼は知覚が、たとえていえばパンと水が人間の生きるための根本であるように、認識活動の中で最も基礎的な——最も粗末で、どこにでもある——ものであるのに対して、歴史は精

神生活中で非常に重要な地位を占めるものと考えた（SM, 205～6）が、私たちは彼が歴史と知覚とを截然と区別せず、知覚を直接感覚に与えられたものと解さなかった点に注目しなければならぬ。

基礎的、初歩的形態としての歴史は知覚である。知覚は歴史的思考の最も単純なケースである。それは事実の初歩的確認である。それでも歴史は知覚の推敲であって、知覚の中にすでに含まれている要素の発展である。そして歴史家が知る世界は、知覚によって与えられた世界の単なる豊化にすぎない。歴史は最高の力にまで上げられた知覚である。（下線筆者；ESSAYS, 49）

従って、これは別の角度から次のように言うこともできよう。すなわち、知覚するということは、私たちが見ないものを見ること、対象を表と裏、尖端と底、過去・現在と未来、換言すれば総合的に全体として把握することである。こうしたコリングウッドの理解はIHで述べられた次の主張とあわせ考えるとき、その意味するところが一層明らかとなるだろう。

視覚の直接経験によって私たちは色彩を見る。ところが思考してはじめて私たちは自分自身が色彩を見ていることを認識し、あわせて現実には見ていないもの、たとえばかつて見たことのある物体も、私たちの見る対象となることを認識しうるのである。（293）

すなわち、これらの二つの文を読み較べてみると、知覚と歴史の関係は、彼にあっては、完全に同じものではないが、そうかといって一線を引いて明確に区別することはできず、直接性を基準にした場合、その強弱によって両者のいずれかがより明らかとなる、そしてそれは媒介性に反比例するとでも言うべきものであろう。

よく考えてみると、すべての知覚には二つの要素がある。すなわち、感覚と思考。思考とは“感覚のデータ”を解釈すること、あるいは回想することである。それに対して感覚とは単なる抽象、純粹なデータをなんら反省することなく、そのまま受け容れるところの限定されたケースにすぎない。ところが実際には、このようなデータは決して手にすることはできない。知覚の対象は、それ自体より更なる、“与えられたもの”の解釈であるところの“与えられたもの”であり、永久にそうである。私たちが普通知覚と呼んでいるものとの違いは、その解釈活動が前者でははっきりせず、ただ反省的分析によって明らかとなるのに対して、後者でははっきりしており、看過できないだけのことである。（ESSAYS, 50）

あらゆる知覚は過去の経験に依存する。（ESSAYS, 50）

現在の経験と過去の経験との比較がはっきりできるようになるに従って、一層正確に知覚できる。私たちは知覚上難しい問題にぶつかった時、それをはっきりと知覚しようとする。その場合、知覚は記憶に頼ることがはっきりしてくる。（ESSAYS, 51）

従って、さきの「年代記、記憶を経て歴史へ」という過程の意味がここで明らかとなる。すなわち、年代記作者は彼が記憶したものを書くわけであるが、その記憶したものとは、かつて彼が知覚したものにほかならない。記憶と知覚とは原理的には同じものであって、両者共歴史的意識そのものではないにしても、それを含んでいる。ただ、記憶と歴史とが異なるところは、

記憶は単なる景観にすぎないが、歴史においては、過去が現在の思考の中で再行されるという点が違う。この思考が単なる思考である限り過去はただ再行されるだけであるが、この思考が思考に関する思考である限り、過去は再行された過去として思考され、私自身に関する私の認識は歴史的認識となる。

.....

しかし歴史的認識は記憶の特殊な例であって、現在の思考対象は過去の思考であり、現在と過去との間隙を橋かけるものは、過去の思考を思考しうる現在の力だけでなく、自己を現在に再覚醒しうる過去の思考の力である。(IH, 293)

知覚にはすでに記憶が含まれている。しかし、知覚にはこの記憶が記憶として意識されていない。…従って私たちは“みせかけの現在,, とでもいうべきもの（これは暗黙の中に記憶を含んでいる）を手に行っている。(SM, 212)

この“みせかけの現在,, the specious presentこそがコリングウッドにとっては歴史的認識のかなめに相当する。彼は歴史学の発展を、記憶にもとづく段階すなわち、伝説を集収する段階——そこでは歴史資料を絶対的権威として崇め、歴史家の主体的働きかけは一切みられない——から証拠を手がかりとして、それを拷問にかけて解答を引出してゆく真の科学的段階へと進む過程として捉えようとしているが、この真の歴史認識の独特の作用が発動するのが、まさにこの“みせかけの現在,, においてである。すなわち、“みせかけの現在,, によって、過ぎ去って今は直接見ることのできぬ事実を知るための唯一の手がかりを得ることができるから。

たしかに、ある点で歴史的思考は知覚に似ている。いずれも個別的なものをその個有の対象とする。私が知覚するものは、この部屋、このテーブル、この紙である。歴史家が考えるものはエリザベス、あるいはマール・ボロー、ペロポネソス戦争あるいはフェルジナンドやイサベラの政策である。しかし私たちが知覚するものは常に、これであり、ここであり、またいまである。遠くの爆音を聞き、また起ってからずっと後の星の爆発をみても、私たちはいま、ここに知覚しえて、それぞれがこの爆発となる瞬間はなお存在する。ところが歴史的思考の対象は、いま、ここには存在しないから、これとはなり得ない。歴史的思考の対象は、すでに起ってしまった出来事や、最早どこにも存在しない状態である。出来事や事態は、それが知覚しえぬようになってはじめて、歴史的思考の対象となる。(IH, 233)

このようにしてコリングウッドは歴史的認識は知覚を完全に排除するものではなく、そうかと言ってそれに留まることもなく、これを含み超えるところの思考独特の働きによってはじめて達成されると説くのである。そして、その要旨をIHの中の History as re-enactment of past experience で論じている。

ここでは彼の歴史認識の特徴を一層適確に理解するために、彼が他の書や論文のあちこちで述べたものを素材として、一般にひどく難解とされている彼の再行 re-enactment という概念について、その全体像を組立ててみることにする。

コリングウッドは他者の思考を再生し、その思考を以前には思考しなかったにせよ、いまは思考するようになり、そうして、この思考活動を他者がかつて思考した思考の再行として知りうる唯一のものとして証拠をあげているが、彼のいう証拠とは具体的にどのような内容をもったものであろうか。

歴史的思考とは、一言でいって最大限の批判的技術をもって、利用できるすべての証拠を解釈（説明）するということにつける。（ESSAYS, 99）

彼（歴史家——筆者註）は過去を知ろうとする。しかも、かつてあったものとしての過去でなく——なぜかという、そうした過去は存在しないし、その上知ることもしないから——現在の痕跡から明らかにされる過去である。彼の世界についての過去、あるいは彼の過去、彼の歴史研究の個有の対象である過去。すなわち、すべての歴史研究がそうあらねばならぬように限定され、またすべての歴史研究がはじめねばならぬように、彼が自分のまわりを知覚する世界から直接生起する過去。この観点に立つと、歴史的思考の個有の目的、方法、対象に関する多くの問題が解き明かされる。（ESSAYS, 102）

しかし、ここで注意しなければならないことは、彼が証拠を思考者である歴史家から切り離して、単なる過去の痕跡（物体）とみなしてはならぬと力説している点と共に、次のもう一つのことである。すなわち、

歴史家ははじめに、ある問題について考え、そのあとで、それに関係のある証拠を探すのではない。問題をして現実のものとするのは、その問題に関係のある証拠を歴史家がもっているということである。（ibid, 102）

科学的歴史においては、証拠として使用されるものはどれも皆、証拠であり、そして、それが使用される機会をもつまでなにが証拠として使用されるかだれひとり知ることはできない。（IH, 280）

証拠を以上のように特徴づけると、それが先にみた歴史的思考と非常に類似した性質のものであることがわかる。しかも、そう考えてはじめて次の彼の主張も理解できる。

あらゆる歴史的問題は窮極的には‘現実、生活から生じる……………私たちが行動するよう求められている状況の中で、一層ははっきりとみるために私たちは歴史を研究する。結局すべての問題は、“現実、生活の平面から生じる。すなわち、その解決のために参考とされるのが歴史である。（A, 114）

いま、ここでの私の生活（実践）——特定の状況における私の問題提起と、その解決という行為——そのものの中で、私の問題提起を契機として、過去の行為者の活動——私とは違う状況での、その行為者の問題提起と、その解決——を思考することによって、私の問題の解決をはかる。従って、現在の歴史家——私——の実践的立場は、その取り扱う証拠を自然科学のデータとは全然性質の異ったものにする。

過去の出来事は、現在世界における歴史家にとって、その証拠となる。出来事そのものの‘痕跡、を残すためには、この痕跡は物体ないしは物体のある状態以上のなにかでなければならない。（下線筆者；A, 96）

さらにここで見落してならぬことは、コリングウッドが歴史的事実の特徴として、それが歴史的過程と同じとする点である。

現実存在し、かつ歴史家がそれを知るものとしての、歴史的事実には常にあるものが別のあるものへと変化する過程でもある。（IH, 163）

過去を現在に伝達するために、その役割を果たすところの「物体以上のあるもの」とは一体なんでしょうか。

証拠と行為の関係

○ 事実 fact について

9. 11. ‘事実、とは歴史が対象とするものの名称である。すなわち、facta, gesta, things done, πεπραγμένα, deeds
9. 12. 事実は同時に第二の意味すなわち, πεποιημένα, things made という意味をもっている。deeds について知るということは、その結果についても知るということである。しかし、あなたは deeds についてなにも知らなくても、その結果について知ることができる。
9. 13. グーア司教がサリスバリー聖堂を建立したというのは第一の意味での事実である。あなたはサリスバリー聖堂について知らなければ、その事実について知ることはいできない。
9. 15. 行為の結果は行為から抽象されたものである。すなわち、歴史研究は行為と行為の結果、この場合には精神活動とその結果、たとえば概念の両方。(下線筆者；以上 NL, 61)

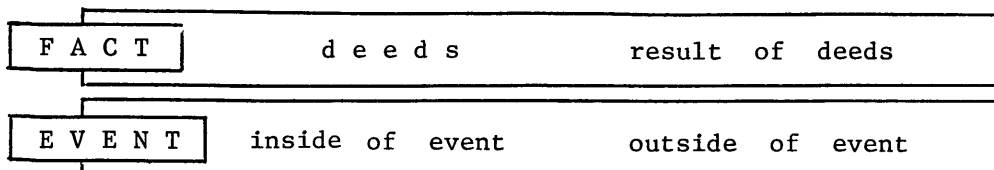
○ 出来事 event について

これについてはかの有名な（——いろいろと論議の標的となったという意味で——）定義がなされている。少し引用が長くなるが、重要な点なのであえて記す。

歴史家は過去の出来事を研究する場合出来事の外側と呼ばれるものと、内側と呼ばれるものとを区別する。出来事の外側というのは出来事のうち物体および物体の運動によって記述されうるものをいう。たとえば、ある時シーザーが部下を率いてルビコンという川を渡ったこと、あるいは別のある日に元老院の床石にシーザーの血が流れたといったことである。出来事の内側とは、出来事の中でただ思考によってのみ記述されうるものをいう。たとえば、シーザーが共和法を無視したこととか、彼を暗殺した者たちとの間の憲政上の衝突がこれである。出来事の両側のうち、その一つを除いて、もう一つの側だけを歴史家が扱うということはない。歴史家は単なる出来事（外側だけで内側のない出来事）ではなく、行為を研究するのであり、行為とは出来事の外側と内側との総合である。歴史家は共和法との関連でのみルビコン渡河に関心をもち、憲政上の争いに関連してのみシーザーの血が流れたことに関心を抱くのである。歴史家の仕事は出来事の外側を発見することから始まるかも知れないが、それで終ることは決してない。歴史家が心に留めておかねばならぬことは、出来事は行為であり、歴史家の主たる役目は、思考によってその行為内に自らを投入し、行為者の思考を見わけることである。(下線筆者；IH, 213-214)

このようなコリングウッドの事実と出来事それぞれの定義の仕方から、両者に共通したものを読み取ることができよう。それを図であらわすと次の通りである。

図 (1)



○ 活動 action について

コリングウッドは、歴史とは「res gestae, 過去になされた人間の活動」としているが、これは先に指摘したように、事実 fact と等しい。しかも「すべての思考は活動のためにある。私たちはいかに生くべきかについて知るために、自分自身および世界を理解せんとする。」(SM, 15, 35)

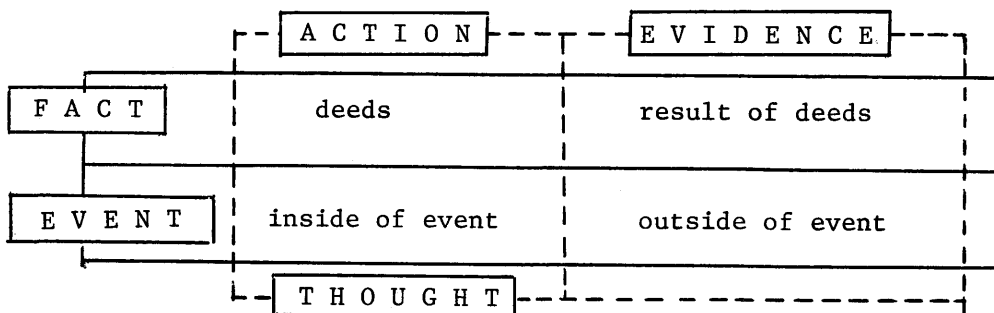
活動それ自体目的であり、目的とされたものはどれも目的である。(SM, 171)

活動は出来事の外側と内側の統一である。(IH, 213)

思考は活動の外的原因ではなく、それは活動そのものの一つの相として表現されるだけである。

人が道徳的、政治的、経済的行為者である限り、彼が行動する方法は、自分自身を知るところの状況について彼が思考する方法と無関係ではない。もしある人の状況の事実に関する知識を歴史的知識と呼ぶならば、歴史的知識は活動にはなくてはならないものである。(下線筆者；A, 147-148)

図 (2)



図IIの中での力点は当然、活動（換言すれば、事実の第一義である deeds, 出来事の内側＝思考行為）に置かれるが、その行為そのものは、その結果を生み、物体あるいは物体の状態を跡として残すから、action と evidence（あるいは trace）は截然と区別できるものではない。もちろん前者がなければ、その結果は生じないわけであるが、事の性質上、後者だけ

が形をとって現われるし、またその中のあるものは永く残留しつづけるのである。

- (a) プーア司教がサリスバリー聖堂を建立した。(NL, 61)
- (b) スコットがアルバート・メモリアムを建てた。(A, 29)
- (c) シーザーが元老院の床を血で染めて倒れた。(IH, 213)
- (d) 短剣で背中を刺されて、机にうつぶしたジョン・ドウの死体が発見された。(IH, 266)
- (e) シーザーがルビコン川を渡った。(IH, 213)
- (f) シーザーは二年つづけてブリテンに侵寇した。(A, 131)

たとえば上記の6つの事例中、(a)、(b)の建築物は現在まで残っている。また、(c)、(d)では死体が一時期その場に存在した。が(e)や(f)では行為とその結果とは密着していて、両者を区別することは一見困難のようである。そこで今しばらく action と evidence の関係、換言すると deed とその結果、あるいは event の内側と外側の関係をコリングウッドがどう捉えていたか調べることにする。

『状況の論理』

彼は、行為者はその置かれた環境(状況)の下でどのように行動したら自己の意図を達成できるか、自問する。この場合、ある状況下での実際行動(X)と、その意図(Y)とは密接な関係、すなわち ‘X because Y, という定式であらわされる関係にある。そして、この場合、YはXの基盤ないしは理由に相当する。しかもXを実際行動、Yをその行動を起こさせる意図と定義して両者を一応区別しているが、XもYも、ある意味からすると共に意図であって、両者は分ち難く、人間の理性的行為はこの両者の働きによってはじめて生起しうるのである。この点に関して、コリングウッドは次のように述べている。

causa quod とは状況あるいは現に存在する事物の状態をいい、causa ut とは目的あるいはもたらさるべき事物の状態のことである。そのいずれを欠いても、原因とはなりえない。……………

causa quod は単なる状況あるいは事物の状態ではなく、それは当の行為者によって知られた、あるいは信じられた状況ないしは事物の状態なのである。……………

causa ut は単なる欲求や願望ではなく、それは意図 intention である。ある方法での人間の行為の causa ut は、その方法で行動するための彼の欲求ではなく、その方法で行動するための彼の意図、目的である。(M, 292-3)

従って彼の場合、‘X because Y, は「Yが原因となってXが結果した」を定式化したものではなく、XもYも共に cause なのである。すなわち、目的実現へ向って現在置かれている状況下で、理性的に行動するために行為者は、その状況を正しく把握し、この特殊個別の状況での最も合理的行動をとる。出来事は現在の状態から、意図した状態への行為者による現状変革の中で生起するものであることがはっきりとした。^{註2)}

問題点 ① what と why

過去の思考を発見することはすでにそれを理解したことと同じである。歴史家は事実を確認してしま

えば、彼には最早その原因を探求する過程は必要ではない。彼は生起したところのものを知れば、それでもう、それがなぜ生起したかを知っているのである。（IH, 214）

上記の主張もいろいろと論議の対象となったが、これはIHより前に述べたもので補ってみると、彼の言わんとするところが明らかとなる。

歴史とは事実の確認である（と先に述べた）。歴史の仕事は生起するもの、生起したものを述べることで、ただそれだけである。しかしこれが異議の生ずる因となる。すなわち、真の歴史家は事実を述べるだけでは満足せず、それを理解しようとする。彼は生起したものだけでなく、なぜ生起したかを探さねばならぬ。すなわち、彼は真実と誤りとを識別しつつ、原因を調べ、その動機を探ぐる。たしかにその通りである。しかし、これは私たちの最初の定義になんら加添するものではない。完全な具体性での歴史事実——そして事実は定義によって具体的である——はすでにそれ自体の中にこれらのことをすべて含んでいる。事実を理解することとは、気ままに孤立したものではなく、その脈絡との実際の関連において事実を確認することである。なぜ、ある出来事が生起したのかという理由は、歴史家によって抽象的・科学的法則の中にでなく、事実、しかも事実そのものの中にだけ求められる。歴史における出来事の原因とは、歴史における他の出来事との内的（本質的）関係をいうのであり、従って因果関係はその外にあるのではなく、そのものの中にある。（下線筆者；SM, 217-8）

コリングウッドは認識を the that と the why のそれに区別し、前者はその過程を反省し、正しくそれがなされたことに満足した命題を再確認するところの確信とみなし、これを認識の最も単純な形態であるとするが、それだけでは誤りは避けられず、その意味では真の知識と言えないとし、それを乗り越えるために why を工夫して、再確認の新しい種類の方法を求めなければならぬという。（NL, 99-100）

これは一見、彼が歴史的認識の手段としての一般法則を否定していることと矛盾するようであるが、彼の真意は次のごときであろう。すなわち、why の説明は一般法則を基にして答えられるべきものではなく、あくまでもそれは意図的なものであるからして、一般法則による一事例として歴史事実を説明することを拒否したにすぎず、why そのものを排除したのではない。換言すれば、what は出来事の外側だけでなく、その内側をも理解することを主眼としたもので、従って当然に why を含み、「与えられたデータから、合理的原理にしたがった推理過程によって理解されるもの」（IH, 176）である点を看過してはならない。従って、この項の冒頭に引用した、「思考を発見することはすでにそれを理解したことと同じである。……」（IH, 214）の文の意味も前記SMの引用文の内容と全く同じで、この問題はこの線上で理解するべきであろう。

問題点 ② past と present

歴史的事実は現在的事実である。歴史的過去とは現在の証拠が現在中に造り出した観念の世界である。歴史的推論をなす場合に私たちは現在の世界から過去の世界へと移動するのではない。経験内での移行とは、常に現在の観念世界の中での移行である。（下線筆者；IH, 156）

上記の下線を施した部分の意味は、「私たちの手の中にある」証拠を解釈することによって、私たちの精神の中に、これらの思考を再創造する中で、「思考である限り、私たちの作り出し

た思考が彼らのものであると知ることができる」ということである。(IH, 296)

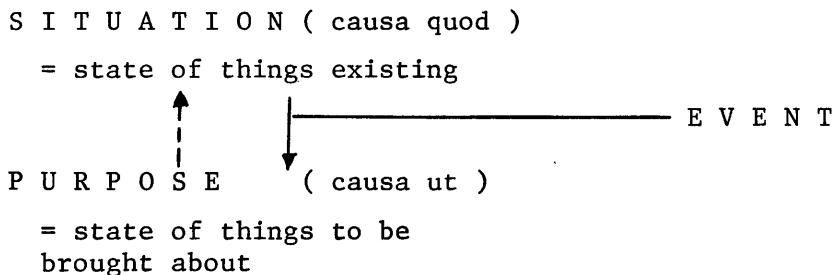
ここで述べられている意味は、さきに引用した「すべての問題が生起する平面は現実の平面で、問題解決のために参考にされるものが歴史である」という言明(A, 114)を解く鍵となる。すなわち、これは歴史的理解のために現在の歴史家が過去の出来事に入ってゆく、所謂感情移入とは全く異なる行為である。コリングウッドのいう「過去の経験の再行」を歴史的直観主義とみなして、多くの人々がこれに批判・非難を浴せてきたが、これは甚しい誤解というべきであろう。それは、

歴史的知識は、過去の思考と対立することによって、現在の思考とは異った平面に過去の思考を制限するところの現在の思考の脈絡の中に萌入れされた過去の思考の再考である。(A, 114)

でも明らかなように、過去の思考とそれについての現在の歴史家の思考は確かにある点からすれば同一であるが、それにもかかわらず、両者は異った二つの思考であることは明らかで、その違いは脈絡にある。この関係について、たとえばコリングウッドはトラファルガー海戦におけるネルソン提督の壮烈な戦死直前の思考を例にとって明らかにしている。当時の思考はネルソンにとっては現在の思考であった。コリングウッドにとって、それは現在に生きている過去の思考、それは萌入れされて自由でないものである。そこでは、コリングウッドは精神の表面下に潜りこみ、ただネルソンについて考えるのではなく、コリングウッドが私はネルソンだと考え、そしてネルソンだと考える中で私自身について考えるのである。(A, 113)

以上の諸事項の関係を図であらわすと次のようになるだろう。

図 (3)



この場合、causa quod から causa ut へ の方向、すなわち、目的に向ってある行動を起すことを示すところの→は、説明の平面でいうと X because Y, すなわち←と方向が逆になる。従って、過ぎ去って現在はもう存在しない出来事が、‘なぜ生じたか、なぜそうなったのか’ という問ではじめられる歴史的認識は、出来事の外側としての行為の結果から、未知なる causa ut と causa quod との関係を明らかにすることによって達成されるのである。

そうしてコリングウッドのこうした推論過程で重要な鍵となるのが状況 situation という概念である。

行為者はまず彼の置かれた現状を正しく知ることが必要であり、しかもその状況下で、意図する目的（新しい状況）を達成するために最良の方法を選んで行動する。これこそ人間の理性的行動過程であるから、そうした行動によって作られたところの歴史を理解するためには、行動の結果をもとにして、行為者の意図は推理してゆけばよい。

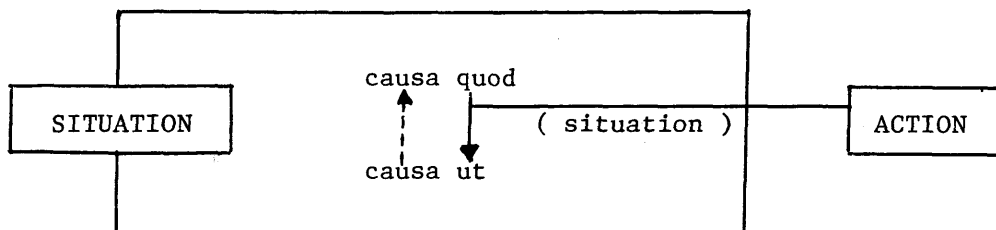
行動しようとする者にとって思考すべき重要事は、彼が位置している状況である。この状況に関して彼は全然自由でない。状況はあるがままのもので、彼も、あるいは他のだれもその状況を変更することはできない。なぜなら、この状況は彼自身ならびに他の人の思考をすべて含んでいるとはいえ、彼自身の側あるいは他人の側で考えを変えても、それは変らない。考えが実際に変っても、これはただ時間の経過によって新しい状況が生じたことを意味するだけである。行動しようとする人にとって、状況は主人であり、託宣であり、神様なのである。彼の行動が成功するか否かは、彼がその状況を正しく把握するかどうかにかかっている。もし彼が賢明であれば、託宣を吟味し、その状況がなにかを発見するために全力を尽した後はじめてどんな些細な計画でも立てるだろう。また彼がその状況を見捨てたとしても、状況は彼を見捨てない。非礼を罰せずにおくような神様ではない。（下線筆者；IH, 316）

しかし、これは状況についての表層的・一面的説明にすぎない。状況が行為者にとって神のごとく絶対的立場にあるという彼の指摘を文字通りにとれば、それは人間の外にあって、すべての人間を規制し、支配するかにみえる。しかしコリングウッドのいう状況は、思考者の主体的行動を抜きにしては考えられないものであり、彼は窮極的には上記引用と矛盾するかにみえる表現でもって前言を否定している。

人間理性の活動の主人であり、託宣であり、神様である状況は、人間理性のこの活動が作り出した状況なのである。（IH, 317）

従って状況とは、行為者を外から規制し、従属させるものとしてではなく、むしろ行為者の理性的行動を軸としてダイナミックに展開する、ある種の運動と解すべきであろう。従って前者と後者の違いは、これを活動の発端からみるか、それとも形成過程全体からみるかの差異にすぎず、あるいはまた、先に指摘した *causa quod* と *causa ut* のもつ独特の関係（すなわち、「両者はそのいずれの一方を欠いては成り立たない」）にみられるように、狭義の situation（=*causa quod*）か、それとも広義のそれ（*causa quod* + *causa ut*）かの違いであるといえよう。このようにみえてくると図Ⅲは、もっと正確には次のように記すべきであろう。

図 (4)



この点を更にはっきりと理解するために、コリングウッドが歴史的出来事を敘述する際にとった具体例を「Roman Britain and the English settlements」の中から取出して、検討してみる。

シーザーはイギリス遠征を企てて、紀元前45年と翌44年の二度にわたって同島に侵寇したが、その理由についてシーザーはなにも語っていない。私たちがこの出来事を理解しようとする場合、いきなり「なぜシーザーは侵攻したか」と問うのではなく、「なぜシーザーは翌夏を待たず、年も押迫っているのに慌しく、しかも大軍ではなくわずか二軍団で進攻したのか」と問うべきだと彼はいう。すなわち、彼はシーザーがイギリスに進攻した時の現実の状況、およびその状況に対するシーザーの読み（これは彼の *Commentarii de Bello Gallico* などに記載されたものから判断して）から問を発し、それとシーザーがそうした行動をとるに至った動機との関連から、出来事を説明してゆくのである。換言すれば、次の二つの間に対する答を見出してはじめて、この問題は解けた（十分に説明された）ことになる。それは1.どんな動機でシーザーはイギリスに侵攻したか、これは先に述べた定式のXに相当する。2.彼は侵攻によって、なにを手にしようとしたか、換言すると、彼の最終目標はなにか、また侵攻計画がシーザーの心に浮んだのはいつごろか、これはYに相当する。従ってコリングウッドが明らかにしようとしているのは、まさに *causa quod* と *causa ut* なのである。

これらに答えられないと、シーザーの遠征についての記述さえはっきりとできないから、尋ねずにはいられない。(32)

○ シーザーの位置した状況

1. ヴェロヴァキエ族の首領たちがシーザーに対して行った抵抗が失敗するや、すぐさまイギリスに逃亡したことで明らかなように、ガリア地方とイギリスとは当時非常に緊密な関係にあった。
2. イギリスから大陸に派遣された軍隊はガリア側に味方してシーザーに敵対した。
3. イギリスはドルイド教の発生地である。
4. 平和維持、反乱の予防・鎮圧がガリアにおけるシーザーの任務であった。
5. 前58年から55年にかけて遂行されたガリア作戦の成功。

これらの状況についてシーザーは次のように考えた。すなわち、ガリアが安泰でない限り、イギリスは不平不満の温床で、そこから飛火していつガリアで反乱が勃発するかも知れず、ガリアの平安のためにはイギリスを害のないものにしなければならない。一方ガリアが平穏にならない限り、海を渡ってイギリスに進攻することはきわめて危険なことである。ローマ軍が海峡を渡ると、ガリアは反乱の坩堝となることは明らかであると。いずれの道も危険である。いずれをとるべきか。

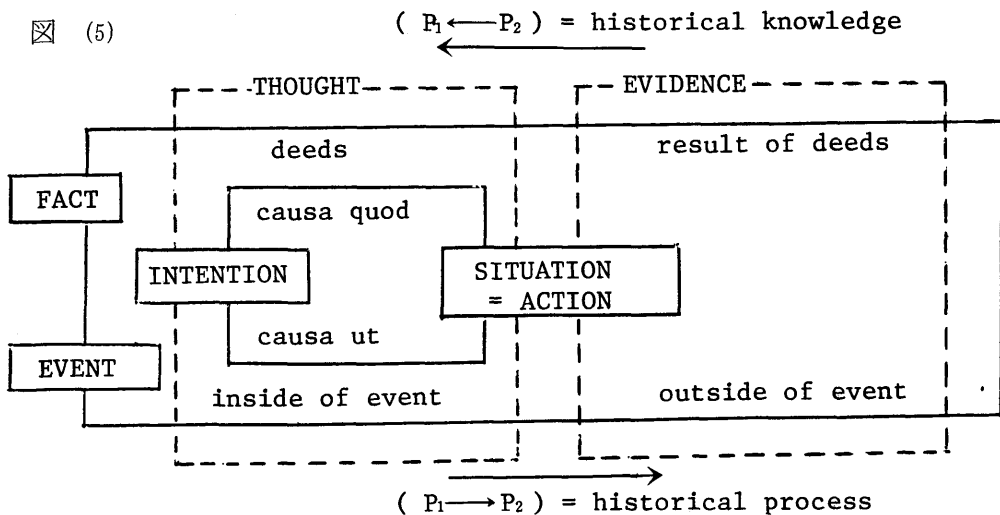
これはシーザーの位置した状況に自らを置いてみて、シーザーがその状況下で考えたことを自らも考え、そこで対処すべき方法を考えることである。(IH, 215)

以上のような思考過程は、同書のクラウディウス帝のイギリス侵攻の敘述においてもみられ、同じような問をコリングウッドは投げかけている。すなわち、なぜクラウディウスがイギリス侵攻を再度開始したか、その理由について当時の人はだれもはっきり述べていない。従ってこれを解くために私たちは、「なぜクラウディウスがイギリスに進攻したか」ではなく、「それまで処置（進攻）が講ぜられなかったのはなぜ当然なのか」と問うべきであると。その意味は、イギリス遠征の計画はシーザー以降ずっとローマの国家政策の一課題となっていた。従って「進攻すべきだ」ではなく、「今こそすべきだ」の理由を解明しなければならない。ところで、クラウディウスの置かれていた状況はそれ以前の状況と異っていた。

1. 軍事状況：イギリス進攻に際してヨーロッパ大陸の治安維持に十分すぎる軍団が編成・配備されていたこと。
2. それまでのイギリスに関する知識は貧弱で、誤りが多く、たとえば諸物資に乏しいと考えられていたが、クラウディウスの時には、鉱産物、小麦、家畜、奴隷等ローマが欲している物資が豊富にあることが分り、このことが彼の進攻の意欲をそそったこと。
3. イギリスの反ローマ政策が年と共に激しさを増したこと。

なお、この二つの例にみられる問の仕方の問題は、コリングウッドが「An autobiography」の中で述べている、自動車動かなくなった時、「なぜ私の車は動かないか」ではなく、「車が動かないのは、第一プラグがスパークしないからか」の問ではじまる、詳細かつ特定の問が必要であると論じているのと同じ論理であるといえよう。（A, 32）,

さて、これまでの推論を整理し、簡略にして図式であらわすと次の通りである。



これでコリングウッドの歴史認識の全過程が明らかになったと思う。すなわち、歴史的説明は result of deeds, the outside of event（いわゆる「単なる出来事」）であるところの過去の行為の痕跡として現に存在する証拠から、deeds, the inside of event を探ぐるという、しかもこれは行為者の置かれた状況を解明することによって、行為者の意図を想定し、定式

‘X because Y, の内容を確立すればよい。 コリングウッドは以上の思考過程を再行と呼んだのである。

従って、彼の再行による歴史理解は決して Patrick Gardiner らのような秘義的な方法ではないことが判明する。 ガーディナーによって指摘されるよりずっと前にコリングウッド自身この問題について、彼独特の意味を付与した incapsulation という語は、なんら神秘的なものではないとはっきり断言しているのである。(A, 141) ただ、こうした誤解を生み、その誤解が多くの批判者に容易に受け容れられていった理由は、一つには再行についての彼自身の説明が不明確で、しかも再行に対する反論を主体にして論を展開したため殊更に難解なものとなった点にあるのだが、これは I H 自体彼の十分な推敲をへて書き上げられたものでないため、彼の他の著作、たとえば「自叙伝」はじめ今まで引用してきた著書などを併せ読めば、ずっとはっきりとしてくるはずである。従って、その誤解の主たる理由は読者が再行という精神的活動の機能的状況を、その全体像の中で捉えることに失敗するか、あるいはそこまでゆかないで、ただ I H 中の再行の項における彼の説明の範囲内での解釈にこだわっているためということができよう。換言すれば、彼の立場からすると、 $P_1 \longrightarrow P_2$ の歴史過程と $P_2 \longrightarrow P_1$ という歴史認識との関係は表裏一体のものでなければならぬ。もっと正確に言うと、後者の活動の中に $P_1 \longrightarrow P_2$ を予想し、含むものであるのに、これを見逃したために誤解が生じたと考えてよいだろう。ところがこの点を見逃し、両者を切離してしまえば、コリングウッドの歴史認識は全く歪なものになってしまう。

歴史家にとって彼が研究している歴史という活動は、ただ凝視される景観ではなく、歴史家の精神の中で生き抜かれた経験なのである。すなわち、それは客観的であり、歴史家に知られる。というわけは、それは同時に主観的であり、歴史家自身の活動でもあるからである。(下線筆者；IH, 218)

註1) コリングウッドの history と perception の関係については、過去にも論じられているが、最近では次のものが可成り深く掘り下げていると思う。

Nathan Rotenstreich; Philosophy, History and politics. 1976, chap. I: C. Issues (特に I. Ways of Cognition) しかし、そこで彼はコリングウッドの歴史認識の方法の説明に時期的な変化(歴史と知覚の一致から相違をへて re-enactment に至る)がみられるとしているが、筆者は一貫性に力点を置き、コリングウッドはむしろその中で歴史認識を理論的に発展させていったものと考ええる。

註2) 拙著「Collingwood の inside/outside of event をめぐって」(1966) で指摘した causa quod, causa ut について、ほぼ同じような理解に立って、Rex Martinが、その著 Historical Explanation 1977, で論じているが、彼はこれを足がかりとして社会科学的説明一般へと拡張を試みているのに対し、本稿ではあくまでも歴史認識についてコリングウッド自身の考えに即して推理・解明していく。

(昭和53年9月5日受理)